

# 昭和戦時の巻 一(八)

## 傳口史女京

頭部に傷を受けた河崎隆子先生は、母に伴われて河崎東軍市に嫁した。折しも夏夏の夜天下、恐怖と飢饉に、母を四つ時以上もその下敷きになったままだった(京女史口伝)。

生のお名前を思い出せないのは「悲しい」と河崎先生は述懐している。

(注)京女史口伝の河崎先生に関する文中、日時、場所、人名は編集部が調査して加筆した。

この時、当時の第三小松寮西原美佐佐長にご登場をねがい、事変を明らかにしていただく。

昭和二十年一月十六日午後十一時、マリナ基地のB29一機が京都に侵入、爆弾を投下した。その一弾が第三小松寮の新館に命中、轟音とともに崩壊した。

昭和二十年一月十八日、一機、轟音とともに崩壊した。救出作業はほぼ完了した。

「二時間」が最も事実に近いと思われる。

次々と下敷きの先生は救出された。先生の間から打撲傷や擦り傷を負った者は多かったが、寮長自身も被害者の一人だった。それに屈せず、素足のまま飛び出して救出作業に奔走した。そして自分のオーパーをぬぎ、赤さにふるえる先生に着せてやった。

「先生の一部は留置院にまで避難し、第二小松寮に接点にも所せましと避難していました。私はコタツによる火災発生を防ぐため、見廻りに駆けずりまわっていました。その時、第二小松寮にいた先生が私を呼びに来た。河崎さんが怪我をしていることがわかり(余の病みはないもの

とみえ本人は怪我をしていることを知らないようでしたが)すぐ京女史の所へお電話し、先生を運んで行つて貰いました。十分な手当がして貰えなかったが、傷が頭部のことですから心配になり、看護婦さんにまた京大病院まで連れて行って貰い、そのまゝ入院してもらいました。傷口はガラスの破片で切つたらしく、三針ほど縫つたと思います。」

と寮長はいっている。

# 救出に全力注ぐ

## B29一機で百人が死傷

二月七日の地震の空襲を受けた原因は先生が灯を消したからだという噂がパツとひろがった。しかも、その噂は河崎先生にふりかかった。負傷している彼女は二重苦を受けねばならぬことになった。これについて西原寮長はこう説明している。

「河崎さんが灯を消していないことは証明できます。灯火が戸外に洩れぬよう十重二十重と覆いをかけ、噴霧をひき、そのうえ私たちは、毎夜、寮の外を見廻して灯火の洩れを厳重に注意していました。午後十時以後は全部消灯してしまします。河崎さんがローションを点けたとしても、電灯が洩れのために解放された」と云っている。

また藤本一恵教授(現女子大教授)が医療器具、薬品、照明用品等を自家用車に積み、香摩あやの看護婦を伴って駆けつけた時は、谷通りは簡陋なたたき、右往左往する人波で混雑していた。数々の死者も出なかったのは奇蹟だ」と語り、「私が南側から第三小松寮を見た時、ちよと真つ二つに裂けて、両側に傾か残骸が落ちていた。ただ、藤本教授は言う、と感涙し、進学通年の自分の娘を京都女専に是非入学させたいと宛意したという。」

話をもう一度もとに戻そう。その夜、かなり強い地震があった。その直後、B29の空襲があったのだが、この「地震」と「空襲」とはいささか関係がある。

前年の昭和十九年十二月七日、藤原河を襲撃地とする大地震があった。この地震は、河崎先生が死傷した原因と関係がある。

「地震」のほうが恐ろしかったとみえる。灯火管制の壁を破つて点けた灯が戸外に洩れた。教授はこれをめがけて爆弾を投下した。谷通り界隈の市民たちの回想である(京女史口伝)。

和田弥三郎教授(現女子大教授)が医療器具、薬品、照明用品等を自家用車に積み、香摩あやの看護婦を伴って駆けつけた時は、谷通りは簡陋なたたき、右往左往する人波で混雑していた。数々の死者も出なかったのは奇蹟だ」と語り、「私が南側から第三小松寮を見た時、ちよと真つ二つに裂けて、両側に傾か残骸が落ちていた。ただ、藤本教授は言う、と感涙し、進学通年の自分の娘を京都女専に是非入学させたいと宛意したという。」

西原寮長は「百十人の先生を収容していた寮で僅かの負傷者ですんだのは、よく訓練がゆきと云っている。たからだと云って下さった向きもありました。」

その夜、越智教授(退職)と兵が寮の被害現場を視察した時、「日

に当直していた成瀬一郎教授(現高松中学校図書室主任)は「炸裂音が轟いて直後、町内の避難民が本館前に百数十人も集って来た。皆おびえ

ていた。まもなく体育館が避難民のために解放された」と云っている。

また藤本一恵教授(現女子大教授)が医療器具、薬品、照明用品等を自家用車に積み、香摩あやの看護婦を伴って駆けつけた時は、谷通りは簡陋なたたき、右往左往する人波で混雑していた。数々の死者も出なかったのは奇蹟だ」と語り、「私が南側から第三小松寮を見た時、ちよと真つ二つに裂けて、両側に傾か残骸が落ちていた。ただ、藤本教授は言う、と感涙し、進学通年の自分の娘を京都女専に是非入学させたいと宛意したという。」

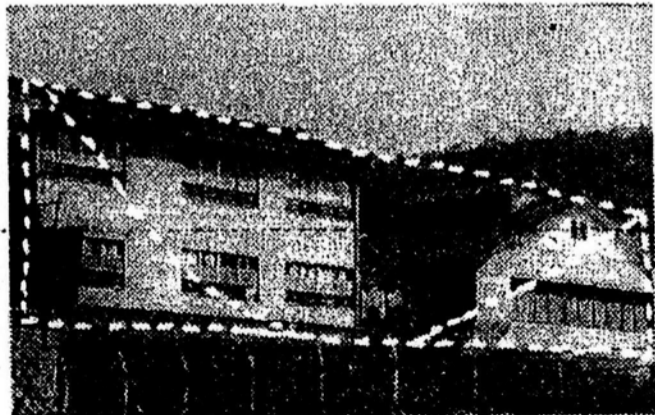
「あつ片付けのために勤労動員(宇治火災隊)を三休んだだけで、また、朝は七時に出勤し夕方七時すぎ帰宅といった具合で、動員の監督(園文科三年)として出勤させられていました。正に昼夜兼行です。毎夜の警報におこされ、疲れて寝こんだ女学生を起し、防空壕へ待避させねばなりません。被爆後(も)のような状態が続きました。(当時、第三小松寮の寮長は藤本今子さんと私と二人で動いていました。)」

と寮長は綴っている。

(注)西原美佐一先生は長から投書があったので、その内容を全部本文中に挿入した。

【水戸】

松岡定雄元校長に関する前身の記事について各方面から意見があったが、紙面の都合上、次号に掲載の予定。編集部



河崎先生が死傷した原因と関係がある。前年の昭和十九年十二月七日、藤原河を襲撃地とする大地震があった。この地震は、河崎先生が死傷した原因と関係がある。

河崎先生が死傷した原因と関係がある。前年の昭和十九年十二月七日、藤原河を襲撃地とする大地震があった。この地震は、河崎先生が死傷した原因と関係がある。